



Title	補文標識の形態と構造
Author(s)	荻原, 達夫; OGIWARA, Tatsuo
Citation	独語独文学科研究年報, 25, 1-18
Issue Date	1998-12
Doc URL	<a href="https://hdl.handle.net/2115/26089">https://hdl.handle.net/2115/26089</a>
Type	departmental bulletin paper
File Information	25_P1-18.pdf



## 補文標識の形態と構造\*

荻原達夫

### 1. はじめに<sup>1</sup>

本稿では、間接疑問文に現れる補文標識の形態を調査し、従来単に [CP [C [IP ... と設定されていた補文標識の構造について、いわゆる Split CP を用いた別の可能性を考察する。具体例としてはドイツ語とオランダ語を主に取り上げる。

ドイツ語とオランダ語を特に取り上げる理由は次の点にある。まず、どちらも機能的にはほぼ等しい2つの補文標識を有していること、それからそのような補文標識を持ちながら、そして系統的に非常に近い関係にあるにもかかわらず、その補文標識の現われ方に明瞭な違いが認められること、である。つまり、機能的に等しい要素が、意味的に同じような環境を用意しても必ずしも同じふるまいをしない、ということである。したがってこの両者を比較することは、補文標識の細かい構造を考えるのに都合がよいであろう。

内容の構成は以下の通りである：まず第2節で補文標識の性質を簡単に確認し；第3節で補文標識が示す形態を概観する（このとき上記2言語以外の言語にも簡単に言及する）；第4節で分析の理論的枠組みを略述し、第5節で補文標識の形態と構造を明らかにする；第6節はまとめである。

### 2. 補文標識の性質

- (1)      a. Er kommt.  
          b. Kommt er?

(1) には a, b という2つの文があるが、どちらも主語、動詞それぞれ1語ずつからなる、まったく単純な文である。両者の違いは (1a) が肯定文で、(1b) が疑問文であるという点にしかない。ここから次のことがわかる。すなわち、「かれは来る」あるいは「かれは来るのか」という内容を表現するには、この2つの単語とその並べかたを知っていれば十分である、ということである。つまり、(1) の文はこれだけで完結しており、これ以上は何も付け足す必要がない。ここで (2) を見ていただきたい。

- (2) a. Ich weiß, daß er kommt.  
b. Sie fragt, ob er kommt.
- (3) a. Ich weiß: Er kommt.  
b. Sie fragt: Kommt er?

(2)の内容は概ね(3)のようにも表現できるから、(2)の **daß er kommt** という部分と **ob er kommt** という部分は(1)の a, b にそれぞれ対応していることがわかる。しかしながら、対応しているとはいっても、(2)と(1)では形が違う。(2)では(1)にはなかった要素(**daß**, **ob**)が現れているからである。すでに述べたように、(1)の a, b はこのままでも意味上十分であって何も付け足す必要がない。しかしながら(2)のように主文に従属する形になると、それまで必要のなかった要素が現れる。このような、意味上はさして重要ではないが、主文との接続という統語論的事情で必要とされる要素のことを補文標識とよぶ。もちろん、単に従属節を導入するだけなら、いわゆる従属接続詞とよばれるものがほかにもたくさんあるが、それらは、あるいは時を表したり、あるいは原因・理由を表したり、もしくは認容を表したりするなど、多くは固有の意味をもっており、純粋に統語論的機能のみを有する、というわけではない。そういうものについては以下では補文標識に含めない。

また「補文標識」という言いかたをする際に、**daß** や **ob** というように具体的な語彙を指していることもあるが、もう少し広い意味で、両者をひっくるめた、一種のカテゴリーとして「補文標識」という言い方をすることもある。つまり、具体的な要素を念頭に置かず、やや抽象的に扱うこともある。たとえば(4)のように、補文標識を抽象的に表現する場合は COMP という記号を使うことがある。したがって(4)は **daß er kommt** と **ob er kommt** との間の相違を省いて表現した、構造表示であると了解されたい。

- (4) COMP er kommt

### 3. 補文標識の諸形態

以上が本稿で扱う補文標識の範囲であるが、(4)を見るかぎり、ただ COMP というのが付加されているだけで、複雑なことは特になさそうに見える。しかしながら、観察する言語の範囲を少し広げると、補文標識の形態というものはいかに限らない、ということがすぐわかる。それを以下で示す。

#### 3-1 ドイツ語

まずドイツ語について考えよう。(5)を見ていただきたい。

- (5) a. Wann kommt er?  
b. Ich weiß nicht, wann er kommt.

(5a) は補足疑問文の直接疑問文である。これに対し (5b) では同じ補足疑問文が間接疑問文として提示されている。(5) の a と b の関係は先ほど見た kommt er? と ob er kommt との関係と同じである。しかし (5) では補文標識の daß も ob も現れていない。ドイツ語文法では一般に、補足疑問文が間接疑問文になっているときは、疑問詞が接続詞の機能を兼ねる、だから daß も ob も要らない、という機能論的説明がなされる。英語でも状況は同じである：

- (6) a. Will he come?  
b. I don't know whether he will come (or not).  
c. When will he come?  
d. I don't know when he will come.

(6) の a, b の関係は先ほどの (1b), (2b) の関係と同じである。ドイツ語で ob となるところに英語では同じ機能をもつ whether という補文標識が入り、その一方で、補足疑問文が間接疑問文になるときは、補文標識が現れない (6c, d).

しかしながら、ここで (7) を参照されたい。

- (7) Ich frage mich, welches Buch daß ich wählen soll.

これは Duden-Grammarik (1995) の 788 頁に記載されている文で、「ドイツ語圏の南部ではこのような文が時折見受けられる。これは標準語的ではない」という説明がついている。Welches Buch 以下の部分に注目されたい。Welches Buch の後にすぐ daß という補文標識が接続している。このことから、「標準語」という枠をはずせば、このようなこともないわけではない、ということがわかる。つまり、間接疑問文になるときに、決定疑問文であれば補文標識がつき、補足疑問文ならつかない、という規則は、すべての場合に強力に成り立つことではない、ということである。さらに (8) の文を見ていただきたい。

- (8) a. Ich weiß nicht, wer daß es getan hat.  
b. Ich weiß nicht, was daß wir tun sollen.  
c. Ich weiß nicht, wann daß der Xaver kommt.  
d. Ich weiß nicht, wieviel daß er kriegt.

これは Josef Bayer がバイエルン方言について論じた Bayer (1984:211) で挙げているものである。<sup>2</sup> これらを見るかぎり、疑問詞が *wer* であっても、*was* であっても、あるいは *wann* または *wieviel* であっても、この方言では補文標識の追加が行なわれている、ということがわかる。なお、同様の現象はバイエルン方言に限ったことではなく、他の方言に関しても報告されている。それをまとめて (9) に示す。<sup>3</sup>

- (9) Alemannisch: Besch/Löffler (1977)  
Bairisch: Bayer (1984), Merkle (1975), Zehetner (1977, 1985)  
Fränkisch: Wagner (1987)  
Norddeutsche Dialekte: Müller (1991)  
Schweizerdeutsch: Bader/Penner (1991), Lötscher (1983), Penner/Bader (1991)

結局ドイツ語は、非標準的な用法まで視野に入れると、間接疑問文の補文標識が決定疑問文のみならず、補足疑問文の場合であっても現れうるということがわかるのである。

### 3-2 オランダ語

オランダ語について考える前に、前節で簡単に触れた英語についても調べてみよう。そうすれば 3-1 節で見たドイツ語の状況が決して特殊ではないことが理解できると思う。

#### 3-2-1 英語

- (10) a. I wonder which dishes that they picked.  
b. They didn't know which model that we had discussed.

(10) は英語 (ただし方言) の間接疑問文の例である。主文との接続部分 (太字の部分) に注目されたい。Which dishes, which model という疑問詞句の後ろに補文標識が認められる。3-1 節で挙げた (6c, 6d) と比較されたい。これについて Radford (1997:271) は次のように述べている。

- (11) a. “Additional support for the claim that operator expressions move into spec-CP comes from the fact that in some varieties of English, preposed *wh*-expressions can precede a complementizer like *that*. This is true, for example, of Belfast English structures (...)” (Radford 1997:271)  
b. “The resulting sequence of covert *wh*-pronouns + Complementizer has an overt counterpart in nonstandard varieties of English (...)” (Radford 1988:486)

すでに見た (6d) が標準的な英語ではあるが、そればかりでなく、このような形も複数の方言で確認できる、ということである。また、(10) が標準語的でない、という点でも、さっきのドイツ語の例

と軌を一にする。したがって英語はその方言まで含めてドイツ語と同じタイプであることがわかる。結局英語もドイツ語と同じように、非標準的な構文まで含めると、決定疑問文で必ず補文標識が現れるのみならず、補足疑問文でも補文標識が現れるということがわかるであろう。

### 3-2-2 オランダ語

オランダ語の補文標識について検討しよう。(12), (13) を見ていただきたい。

- (12) Ik weet niet of hij thuis is.  
Ich weiß nicht, ob er zu Hause ist.
- (13) a. Ik weet niet, waar ze wonen.  
Ich weiß nicht, wo sie wohnen.  
b. Ik weet niet, waar dat ze wonen.  
Ich weiß nicht, wo daß sie wohnen.  
c. Ik weet niet, waar of ze wonen.  
Ich weiß nicht, wo ob sie wohnen.  
d. Ik weet niet, waar of dat ze wonen.  
Ich weiß nicht, wo ob daß sie wohnen.

各文の下にはドイツ語の逐語訳を示してある。この逐語訳からわかるように、オランダ語の場合、決定疑問文では必ず補文標識 *of* (ドイツ語の *ob*) が現れるという点でドイツ語、英語と共通しているが、補足疑問文の場合は実に多様な形態が可能で、

補文標識がない場合 (13a),  
*dat* (ドイツ語の *daß*) が現れる場合 (13b),  
*of* (ドイツ語の *ob*) が現れる場合 (13c),  
*of* と *dat* が現れる場合 (13d)

の4通りが観察できる (ANS 1997, Donaldson 1997)。ただ、この4つの可能性のうち標準語・書き言葉として推奨されているのは (13a) である。例えば (14) の記述を参照されたい。

- (14) a. "Often a superfluous subordinating *of* and *dat* is used after these words in colloquial speech, but the practice should be avoided." (Donaldson 1997:244)  
b. "De vragende voornaamwoorden in bijzinnen kunnen in regionaal informeel taalgebruik gecombineerd worden met *of* of *dat*. Deze beide voegwoorden worden in deze combinaties niet in dezelfde delen van het taalgebied gebruikt (*of* komt dan alleen in Nederland voor, met name in de

provincies Noord- en Zuid-Holland, *dat* vooral in België en in de provincie Noord-Brabant).” (ANS 1997:317-319)

c. “In informele taal komt na vragende bijwoorden in bijzinnen toevoeging van *dat* of *of* voor, maar alleen regionaal (*dat* vooral in de provincie Noord-Brabant en in België, *of* vooral in de provincies Noord- en Zuid-Holland).” (ANS 1997:458)

明らかに (13b) 以下の用法は奨めていない。(14b), (14c) によれば (13b) 以下の構文は方言的で、くだけた感じがする、ということである。そしてさらに、(13b) のように補文標識 *daß* が現れる地域と (13c) のように *ob* が現れる地域は一致しておらず、どちらか一方のみがもっぱら使われるなどということも述べられている。<sup>4</sup> しかしながら、結果としてここでもまた広く方言を観察すると、補文標識のある例がめずらしくない、ということがわかるであろう。<sup>5</sup>

ドイツ語との違いは間接疑問文における補文標識の形態が多様であるという点である。統語論的にはオランダ語は英語よりもドイツ語に近いはずであるが、補文標識に関して言うと、むしろドイツ語と英語が似たような分布を示し、オランダ語は特殊である。この特殊性は何に起因するのであろうか。その分析に取りかかる前に、まず次節で補文標識の分布についてまとめよう。

### 3-3 さまざまな補文標識

間接疑問文における補文標識の分布はまとめると (15) のようになる。

- (15) a. COMP er kommt (ob er kommt)  
b. wann COMP er kommt (wann 0/daß/ob er kommt)  
c. wann COMP COMP erkommt (wann ob daß er kommt)

(15a) は決定疑問文が間接疑問文になった場合である。(15b) は疑問詞+補文標識という構文を表す。この場合、標準語・方言を含めたドイツ語タイプではゼロか *daß* かの二者択一になり、オランダ語タイプではそれに *ob* も含めた三者択一となる。(15c) はドイツ語にはない形で、オランダ語に見られる構造である。

### 4. 補文標識の形態を分析する

以下では、第3節で示した補文標識の諸形態を包括的にとらえる方法、すなわち、これらの多様な形態をできるだけ統一的に説明する方法を示したいと思う。

具体的な考察に入る前にまず理論的前提を明らかにする。<sup>6</sup>

#### 4-1 統語構造の形成

まずは補文標識の導入に関わる統語構造の形成プロセスである。これは2つの構造を順次結合して拡大していくことで実現される。この操作を Merge という。例えば (16) を使って手順を説明すると、

- (16) a. Bier + trinken --> Bier trinken  
b. gem + [Bier trinken] --> gem Bier trinken  
c. er + [gem Bier trinken] --> er gem Bier trinkt  
d. ob + [er gem Bier trinkt] --> ob er gem Bier trinkt  
e. wissen + [ob er gem Bier trinkt] --> wissen ob er gem Bier trinkt  
...

- 1) Bier という名詞と trinken という動詞を Merge して Bier trinken という動詞句を作る (16a)
- 2) 副詞 gem をこの動詞句と Merge して gem Bier trinken という構造を作る (16b)
- 3) 代名詞 er をこの構造に Merge し、er gem Bier trinkt という構造を作る (16c; 動詞の形態変化については無視する)
- 4) 補文標識 ob を Merge して ob er gem Bier trinkt を作る
- 5) 動詞 wissen を Merge して wissen ob er gem Bier trinkt を作る

というようになる。(17) のような派生は3項結合であるから認められない。

- (17) \*gem + Bier + trinken --> gem Bier trinken

したがって補文標識に関して言うと、文の基本的な骨組みが完成してから補文標識が Merge によって導入される、ということになる。

#### 4-2 素性照合と移動

次に「移動」および「素性照合」という概念について述べる。これは補足疑問文における疑問詞の位置に関わる概念である。

- (18) a. wann + kommen --> wann kommen  
b. er + [wann kommen] --> er wann kommt  
c. COMP + [er wann kommt] --> COMP er wann kommt  
d. wann + [COMP er \_\_\_\_\_ kommt] --> wann COMP er kommt

┌──────────┐

(移動)

e. wissen + [wann COMP er \_\_\_\_ kommt] -> wissen wann COMP er \_\_\_\_ kommt

(18) a から e は補足疑問文の間接疑問文を生成するプロセスを表している。ここで補文標識 COMP が音形的にゼロならば標準語、daß ならば非標準的なドイツ語になる。基本的なプロセスは (16) と同じであるが、疑問詞がある分だけ複雑にしなければならない。構造内部の要素を取り出してその構造の外部に再び Merge するという (18d) のようなステップが加わるからである。このステップを「移動」とよぶ。したがって疑問詞はいったん Merge によって文の内部に導入され、それからあらためて文頭すなわち COMP の左に「移動」することになる。この移動は義務的である:

- (19) Ich weiß nicht,  
a. \*COMP er wann kommt.  
b. \*mit wem wann COMP er kommt.  
c. wann COMP er mit wem kommt.  
(COMP=0/daß)

(19a) が示すようにドイツ語では疑問詞が元の位置にとどまっていると非文法的な構造になる。さらにまた (19b,c) から、疑問詞が2つ以上移動してしまうのもまずい、ということもわかる。すなわち、移動できる疑問詞の数は、ドイツ語では1個に限定されている。

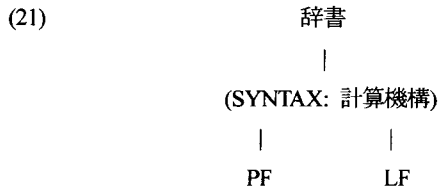
この事実を説明するのに「素性の照合」という概念を用いる。この場合に関して言えば、補文標識 COMP が内包する特定の素性が、素性の照合を実行して、文の派生を管理することになる。たとえば COMP (の中の素性) は疑問詞を1つだけ呼び寄せて、疑問詞が先頭に来るようにしつつ、同時に2つ以上は呼び寄せないような働きをする。この状況を図式的に示したのが (20) である。(20) の <wh> というのは照合される素性を表す。

- (20) a. COMP<wh> + [er wann<wh> kommt]  
b. wann<wh> [COMP<wh> er \_\_\_\_ kommt]

┌──────────┐  
(照合)

#### 4-3 SYNTAX と PF と LF

最後に統語構造の派生と音声・意味の関係を明らかにしよう。(21) の図式を見ていただきたい。



(21) の辞書は、個々の語彙に関する情報や、<wh>のような素性をストックしている。計算機構 SYNTAX というのは、構造を組み合わせて拡大したり、あるいは要素を移動させるなどして文を形成する作業を行なう。PF は計算機構の出力に物理的な形態を与える部門である。LF というのは構造的に定義される意味を表示する部門である

SYNTAX の具体的な働きは 4-1, 4-2 節で見た通りである。

PF の機能については次のように考える:

名詞や動詞といった非機能範疇は、辞書に与えられた独自の音韻情報をもっており、PF はそれをそのまま解釈する。たとえば、Hund や bellen (実際にはおそらく bell-) は辞書的に与えられた音韻情報を (ほかの範疇情報や意味情報とともに) 持ったまま SYNTAX に導入され、PF で音形を与えられる。

AGR などの機能範疇は音韻情報を辞書によって完全には与えられてはおらず、PF は特定の連鎖を解釈して音形を決定する。たとえば AGR<Sg, 3 Pers, Pres>は動詞 V と特定の連鎖 V^AGR を形成し、これを PF は読み取って音形を決定する (V=bellen だったら、bellt という形が出力される)。<sup>7</sup>

LF はたとえば<wh>がどこにあるかを見つけて疑問文の作用域を決定する。したがって間接疑問文であれば必ず<wh>を含まなければならない。

次節では、以上の理論的枠組みを用いて間接疑問文における補文標識の諸形態を分析する。

## 5. さまざまな補文標識をどうとらえるか

### 5-1 補文標識の形態

まず問題点を整理する。(22), (23) は、補文標識の現われ方をまとめたものである。わかりやすさのためオランダ語の統語構造もドイツ語の単語を使って表現する。

- (22)
- a. COMP<wh> er kommt
  - b. wann COMP<wh> er kommt
  - c. wann COMP2<wh> COMP1 er kommt
- (23)
- a. (Ich frage mich,) ob er kommt.
  - b. (Ich frage mich,) wann 0/daß/ob er kommt.

c. (Ich frage mich,) wann ob daß er kommt. (... \*wann daß ob ...)

まず (22a) に関しては、補文標識 COMP として ob が入る (23a)。これに関しては言語差・方言差はない。<sup>8</sup>

次に (22b) であるが、この場合は (23b) のように、COMP が音声的にゼロになるか (標準語的)、それとも daß になるか (非標準語的)、あるいはオランダ語のように ob になるか、という3つの可能性がでてくる。このとき、ob の入るオランダ語の形はドイツ語では標準語・方言を問わず不可能である (Stechow/Sternefeld 1988:382)。<sup>9</sup>

それから (22c) の形だが、このように補文標識が2つ並ぶときは、(23c) のようにならず ob daß という順序になり、その逆はない。

以上のことをまとめると (24) のようになる。

- (24)
- a. 直接疑問文の間接疑問文では、補文標識は ob である。
  - b. 補足疑問文の間接疑問文では、補文標識は3通りの可能性を示す。
  - c. 補文標識が2つ連続して生じるときは必ず ob daß となる。

## 5-2 補文標識の構造

まず構造という点から (24) の性質を点検しよう。

(24a) であるが、これは文を派生していく段階で <wh> という素性をもった COMP が導入されることから生じると一般に考えられている。つまり (25a) のような形で COMP<wh> が導入され、そしてそのとき移動すべき疑問詞がなければ、(25b) の PF 規則で音声的に ob になり、結果的に ob er kommt という文がでてくる、というわけである。

- (25)
- a. SYNTAX: COMP<wh> + er kommt --> COMP<wh> er kommt
  - b. PF: COMP<wh> --> ob

次に (24b) についても同じように派生のプロセスを考えると、今度は COMP<wh> を結合してから、さらに疑問詞が加わるため、(26) のようになる。

- (26)
- a. SYNTAX: COMP<wh> + [er wann<wh> kommt] --> COMP<wh> er wann<wh> kommt
  - b. SYNTAX: wann<wh> + [COMP<wh> er \_\_\_\_\_ kommt] --> wann<wh> COMP<wh> er kommt

ここで (25b) の規則を適用すると非標準オランダ語の (27a) が派生する。標準語的な形である (27b) は派生しない。

- (27) a. wann ob er kommt  
b. wann 0 er kommt

ただし (25b) の規則を (28a) のように書きかえると, (28b) のような文が派生されてしまう.

- (28) a. COMP<wh> --> 0/ob  
b. \*Er fragt, 0/daß er kommt.

これは結局, COMP<wh> を直接 PF 規則で扱おうとするかぎり, 問題を構造的に解決することはできない, ということを示している.

同様の問題は (24c) についても起こる. 補文標識が2つ連続しているのだとしたら, 数字の上では (29) のように4通りの可能性が生じるはずであるが, 実際に可能なのは (29a) だけだからである.

(29)	COMP2	COMP1
a.	ob	daß
b.	ob	*ob
c.	*daß	*ob
d.	*daß	daß

### 5-3 分析

こういったことを解決するのに, 本稿では (30) を仮定する.

- (30) a. COMP の素性<wh>を独立したカテゴリー (Wh) にする (Split CP Hypothesis).<sup>10</sup>  
b. Wh に「カウンター」を設定する.

(30a) は, SYNTAX に (31a) のようなプロセスを追加することを意味する.

(30b) の「カウンター」というのは (31b) のように疑問詞を照合するたびにもともとあった値  $n$  から1だけ減じていくアルゴリズムが存在している, ということである.

- (31) a. Wh< $n$ > + [COMP er wann<wh> kommt]  
b. wann<wh> + [Wh< $n$ > COMP er \_\_\_\_\_ kommt]  
     \_\_\_\_\_ --> wann<wh> Wh< $n-1$ > COMP er \_\_\_\_\_ kommt  
     (照合)

なぜ計数的装置を仮定するかというと, (19b, c) で触れたように, 疑問詞はドイツ語の場合必ず1つしか移動しないことから, 2つ以上の移動を阻止するために, なんらかのアルゴリズムが必要になってくる, と考えるからである.

以下ではこれらの仮定にもとづき, Wh カウンターの初期値を適切に設定すれば, 前節で見た問題を解消することができることを明らかにする.

Wh というカテゴリーは基本的に疑問の作用域, つまりどこまでが疑問文かを表示する働きをもっているから, 可能性として (32) の4つのオプションが考えられる.

- (32)
- a. 初期値が0ならば, Wh は疑問の作用域を表示しない.
  - b. 初期値が1ならば, Wh は疑問の作用域を表示する.
  - c. 初期値が2ならば, Wh は疑問の作用域を表示し, さらに疑問詞を1つだけ照合することができる.
  - d. 初期値が3以上ならば, 疑問の作用域を表示し, さらに  $n=1$  になるまでいくらかでも疑問詞の照合ができる.

(32a) は通常の *daß* 文として解釈され, 間接疑問文を形成しない. つまり 'Wh<0> COMP' はつねに *daß* になる.<sup>11</sup>

(32b) は決定疑問文を派生する. 疑問詞の照合はできない. もし初期値が1で, さらに照合を行なってしまうと,  $n=0$  となり, 作用域が消滅する.

(32c) は決定疑問文も補足疑問文も派生する.<sup>12</sup> 疑問詞を1つ照合しても, まだ  $n=1$  だから補足疑問文も可能になるのである.

(32d) のオプションは補足疑問文で複数の疑問詞が文頭に現れることを可能にする.<sup>13</sup>

この中で実際に関係すると思われるのは b, c, つまり  $n=1$  か2のときだけである.

これを (33) のそれぞれに当てはめるとどうなるか. (34) のような構造が設定できるはずである.

- (33)
- a. (Ich frage mich,) ob er kommt.
  - b. (Ich frage mich,) wann er 0/daß/ob kommt.
  - c. (Ich frage mich,) wann ob daß er kommt.
- (34)
- a. SYNTAX: Wh<1>/Wh<2> + [COMP er kommt]
  - b. SYNTAX: wann + [Wh<2> COMP er kommt]
  - c. SYNTAX: wann + [Wh<2> COMP [Wh<0> COMP er kommt]]

(33a) に関しては (34a) が示しているように,  $n=1$  と  $n=2$  の両方の可能性がある.

もし,  $n=1$  だとすると, PF 規則で (35a) が立てられる. これを (34b) の照合後の形に適用すると,

(35c) が派生する。<sup>14</sup>

- (35) a. PF: Wh<1> COMP → ob  
b. wann Wh<1> COMP er kommt  
c. wann ob er kommt

すでに述べたようにこれは一部の非標準オランダ語の形である。よって  $n=1$  というオプションはオランダ語にのみ有効である。

$n=2$  の場合は、(36a), (36b) のような別々の規則が立てられる。

- (36) a. PF: Wh<2> COMP → ob  
b. PF: Wh<1> COMP → 0/daß

したがって (34a, b) の初期値は  $n=2$  である。これは各標準語と非標準ドイツ語、非標準オランダ語の一部、非標準英語に有効なオプションである。しかし初期値が2以下だとすると、(34c) に関して問題が起こる。(34c) から照合によって (37a) が生じ、そこに PF で (37b), (37c) が適用されると (37d) が派生してしまうからである。つまり、初期値2以下のオプションでは解決できないことがわかる。

- (37) a. wann Wh<1> COMP2 Wh<0> COMP1 er kommt  
b. PF: Wh<1> COMP2 → daß  
c. PF: Wh<0> COMP1 → daß  
d. wann daß daß er kommt

これを解決するには、(32c) のオプションすなわち初期値が3(以上) の場合を考えに入れなければならないだろう。上述のようにこのオプションは多重疑問詞移動の基礎となるものであるが、この初期値3(以上) というのは移動する疑問詞の個数を表示するという機能を元来もっているわけではなく、副次的効果として疑問詞の移動を規制しているにすぎない。したがって、これが他の効果をもつことは十分ありうる。その可能性を検討してみよう。初期値が3だとすると (34c) は (38a) のような派生をたどり、(38b) のような形に到る。

- (38) a. SYNTAX: wann + [Wh<3> COMP2 [Wh<0> COMP1 er kommt]]  
b. wann Wh<2> COMP2 Wh<0> COMP1 er kommt

ここで PF 規則 (36a) が適用されると (39) が生じる。

(39) a. wann ob daß er kommt

これはまさに (33c) の形である。つまり、初期値 3 も非標準オランダ語では可能なオプションなのである。<sup>15</sup>

以上のように、(30) を仮定すると、言語間の差異は Wh カウンターの初期値としてどの値が利用可能かという点で説明することができる。結局、間接疑問文に見られる補文標識の諸形態は、構造と音声規則の相互作用に由来するものであり、数値の差という小さなポイントによって、補文標識の形態が大きく異なってくるのである。

## 6. まとめ

最後に全体をまとめる。

本稿で述べたことは、

1. 間接疑問文のに見られる補文標識には、いくつかの形態が認められるということ、
  2. しかしながら、それには一定の制約があるということ、
  3. そして、そういった性質は音声規則と構造の相互作用で説明できること、
- の3点である。

## 7. 補遺：日本語の補文標識

Wh カウンターを利用して日本語の間接疑問文に伴う補文標識「か」を分析してみよう。

まず基本的事実として次のことを前提とする。

1. 決定疑問文が間接疑問文になるときは「か」は「かどうか」になる。「か」のみだとややすわりが悪い。

- (A1) a. 太郎が来るかどうか知っていますか。  
b. ?太郎が来るか知っていますか。

2. 補足疑問文が間接疑問文になるときは「か」のみが可能。「かどうか」はつかない。

- (A2) a. だれが来るか知っていますか。  
b. \*だれが来るかどうか知っていますか。

語順をドイツ語に合わせて考えると (A3) のような構造が仮定できる。(A3a) は決定疑問文、(A3b) は補足疑問文である。

- (A3) a. SYNTAX: Wh<*n*> COMP [太郎が来る]

b. SYNTAX: だれが Wh<*n*> COMP [*t* 来る]

(A3) において  $n=0$  だと疑問文にならない。  $n=1$  の場合、PF 規則を (A4) のようにすれば、補足疑問文に関しては適切な形がえられる。

(A4) PF: Wh<1> COMP -> か

しかし決定疑問文の「かどうか」がこれでは生成できない。そこで (A5) の規則が必要である。

(A5) PF: Wh<2> COMP -> かどうか

つまり、初期値は決定疑問文、補足疑問文を問わず 2 であり、補足疑問文に関しては、疑問詞照合のため  $2-1=1$  になる、と考えればすっきり行く。なお、時折報道関係の記者がテレビ中継などで (A2b) に類する発言をすることがあるが (アナウンサーが読むニュース原稿では聞かれない)、これは Wh カウンターという点から見ると、初期値を 3 にしているということになる。これは通常のオプションではない。おそらく問題の重要性を強調しようとするあまり、「過剰な」値が設定されてしまうのであろう。詳しくはわからないが、オランダ語に初期値 3 のオプション (補文標識が二重に用いられるケース) にも似たような事情があるのかもしれない。

## 注

\*本稿は文部省科学研究費補助金 (特別研究員奨励金) による研究成果の一部である。

1. 本稿の内容は、北海道ドイツ文学会第 48 回研究発表会 (1998 年 12 月 12 日、北海道大学言語文化部) における口頭発表『補文標識の構造について』にもとづいている。ただし内容的に若干の変更を加えてある。
2. 原文では個々の単語もバイエルン方言になっているが (たとえば ich weiß nicht は i woß ned という具合に書いてある)、ここでは説明の都合上すべて標準語の単語に置き換えることにする。
3. (i), (ii) のような記述も参考にされたい。
  - (i) “This property distinguishes Bavarian markedly from Standard German, though not from a number of other German dialects.” (Bayer 1984:211)
  - (ii) “Interessant ist wiederum, daß doppelte C-Füllung nicht nur im Bayrischen, sondern auch in manchen norddeutschen Dialekten eher Normalfall als die Ausnahme darstellt.” (Müller 1991:148)

したがって、補足疑問文の間接疑問文では補文標識は機能的に不必要である、というのは可能な解釈

の一つにすぎない。

4. ただ、このような一般的な文法書でこういう現象の存在をわざわざ指摘しているということ、蘭独辞典の of (つまりドイツ語の ob) の項を引くと、(i) のような使用例が載っていて (Van Dale)、この of はドイツ語のは訳さないという注記がついていたりすることなどから察すると、オランダ語はドイツ語や英語ほどには標準語の規範力が強くないように思われる。

(i) Ik weet niet, wie of het gedaan heeft.

Ich weiß nicht, wer es getan hat.

5. 以下では取り上げないが、西フリジア語での補文標識の使用はもっと徹底しており、dat ‘daß’ の縮約形 ‘t が必ず伴う。これには決定疑問文の間接疑問文も該当する (西フリジア語の oft はふつう of + ‘t と分析される):

(i) a. Sy wit net oft er juster thúskommen is.

Sie weiß nicht, ob dat er gestern nach Hause gekommen ist.

b. \*Sy wit net of er juster thúskommen is.

(ii) a. Ik wit net wannear’t er komt. (Ich weiß nicht, wann-daß er kommt.)

b. Ik wit net wannear oft er komt. (Ich weiß nicht, wann ob-dat er kommt.)

c. \*Ik wit net wannear er komt. (Ich weiß nicht, wann er kommt.)

詳しくは清水 (1997, 1998), Tiersma (1985) を参照。また北欧語に関しても、間接疑問文の疑問詞が主語の場合には必ず補文標識 som (デンマーク語は der) が伴う:

(iii) a. Jag undrar, vem som har gjort det.

Ich frage mich, wer daß es getan hat. (スウェーデン語)

b. Jeg vet ikke hvem som kommer.

Ich weiß nicht, wer daß kommt. (ノルウェー語)

c. Vet du, hvem der har boet i det hus?

Weißt du, wer daß in diesem Haus gewohnt hat? (デンマーク語)

デンマーク語の der に関しては Vikner (1991) の議論を参照。

6. 理論全体にわたっての紹介はせず、したがって議論に直接関係のない部分は省略する。技術的詳細にはついては Chomsky (1995) の第 4 章を参照されたい。

7. 要素は完全に屈折した形で SYNTAX に導入されるという見解は取らず、Halle/Marantz (1993) の “Distributed Morphology” 的な見解を取る。

8. 低地ドイツ語方言では ob の代りに wat ‘was’ を使うことがある (Kloock/Viechelmann 1989)。

(i) Wat ik em maal anroop?

Ob ich ihn mal anrufe?

ただしこの方言では ob だけでなく、daß が入るべきところでもこの wat が入ることがあるから、これは ob/daß という対立を中和した形態であろう。

(ii) He seggt, wat he dat nich weet.

Er sagt, daß er das nicht weiß.

9. オランダ語でも間接疑問文の形が崩れると不可能になる (Vikner 1995:123):

(i) \*Hoe wil je weten of je deze groenten moet koeken?

Wie willst du wissen, ob du dieses Gemüse kochen sollst?

10. E. Hoekstra 1993, J. Hoekstra 1994, Müller/Sternfeld 1993, Vikner 1991, 1995, Zwart 1997などを参照.

11. Whが<0>であるならば, そのWhはLFで何の役割も果たしていないということになる. したがってこのオプションは成立しない可能性がないわけではない. しかしながらPFで機能範疇は単独で解釈されないとの立場を取れば, やはりWhは理論的に必要である:

(i) a. Ich weiß [daß er kommt].

b. ... Wh [COMP er kommt]

また, すぐ後で出てくる初期値1のWhとの違い ('Wh<1> COMP'は音形的にゼロにもなりうる)も考慮に入れると, やはりWh<0>も不可欠である.

12. 決定疑問文の場合は $n=2$ のまま.

13. ただし, 注14を参照.

14. 照合後なので $n=2-1=1$ .

15. ただし, どのようにしてオランダ語の疑問詞が多重移動するのを防ぐかという問題が生じる. これは, Whはそれぞれ1つの疑問詞しか照合できないと考えれば解決できる.

(i) a. SYNTAX: [Wh<3> COMP2 [Wh<0> COMP1 er wann mit wem kommt]]

b. SYNTAX: mit wem [Wh<2> COMP2 [Wh<0> COMP1 er wann t kommt]]

したがって (32d) のオプションは実際は多重移動とはまったく関係がない可能性がある.

## 文献

Allan, Robin/Philip Holmes/Tom Lundskaer-Nielsen. 1995. *Danish. A Comprehensive Grammar*.

London/New York.

ANS. 1997. *Algemene Nederlandse Spraakkunst*. Groningen.

Bader, Thomas/Zvi Penner. 1991. Das Complementizer-System der Freien Relative im Berndeutschen unter

Berücksichtigung universalgrammatischer Aspekte. Olsen, Susan/Gisbert Fanselow (hrsg.) *DET,*

*COMP und INFL: Zur Syntax funktionaler Kategorien und grammatischer Funktionen*. 137-154.

Tübingen.

Bayer, Josef. 1984. COMP in Barvarian Syntax. *Linguistic Review* 3. 209-274.

Chomsky, Noam. 1995. *A Minimalist Program for Linguistic Theory*. Cambridge, Massachusetts.

Donaldson, Bruce. 1997. *Dutch. A Comprehensive Grammar*. London/New York.

Duden-Grammatik. 1995. *Duden Grammatik der deutschen Gegenwartssprache*. Mannheim et al.

- Hoekstra, Eric. 1993. Dialectal Variation inside CP as Parametric Variation. Abraham, Werner/Josef Bayer (hrsg.) *Dialekt Syntax*. 161-179. Opladen.
- Hoekstra, Jarich. unpublished. The Split CP Hypothesis and the Frisian Complementizer System. Ms.
- Holmes, Philip/Ian Hinchliffe. 1994. *Swedish. A Comprehensive Grammar*. London/New York.
- Kayne, Richard S. 1994. *The Antisymmetry of Syntax*. Cambridge, Massachusetts.
- Löffler, Heinrich/Werner Besch. 1977. *Dialekt/Hochsprache - Kontrastiv. Alemannisch*. Düsseldorf.
- Lötscher, Andreas. 1983. *Schweizerdeutsch. Geschichte, Dialekte, Gebrauch*. Stuttgart.
- Halle, Moris/Alec Marantz. 1994. Distributed Morphology and the Pieces of Inflection. Hale, Kenneth/Samuel Jay Keyser (ed.) *The View from Building 20*. 111-176. Cambridge, Massachusetts.
- Merkle, Ludwig. 1975. *Bairische Grammatik*. München.
- Müller, Gereon. 1991. Abstrakte Inkorporation. Olsen, Susan/Gisbert Fanselow (hrsg.) *DET, COMP und INFL: Zur Syntax funktionaler Kategorien und grammatischer Funktionen*. 155-202. Tübingen.
- Penner, Zvi/Thomas Bader. 1991. Main Clause Phenomena in Embedded Clauses: The Licensing of Embedded V2-Clause in Bernese Swiss German. *Linguistic Review* 8. 75-95.
- Radford, Andrew. 1997. *Syntactic Theory and the Structure of English. A Minimalist Approach*. Cambridge.
- 清水誠. 1997. 『西フリジア語の文法構造——代名詞——』北海道大学文学部紀要 45-2.
- 清水誠. 1998. 『西フリジア語の文法構造——接続詞——』北海道大学文学部紀要 46-3.
- Strandskogen, Aase-Berit/Rolf Strandskogen. 1995. *Norwegian. An Essential Grammar*. London/New York.
- Tiersma, Pieter Meijes. 1985. *Frisian Reference Grammar*. Dordrecht.
- Van Dale. 1986. *Van Dale Groot woordenboek Nederlands-Duits*. Utrecht/Antwerpen.
- Vikner, Sten. 1991. Relative der and other C0 Elements in Danish. *Lingua* 84. 109-136.
- Vikner, Sten. 1995. *Verb Movement and Expletive Subjects in the Germanic Languages*. Oxford/New York.
- Wagner, Eberhard. 1987. *Das fränkische Dialektbuch*. München.
- Zehetner, Ludwig. 1977. *Dialekt/Hochsprache - Kontrastiv. Bairisch*. Düsseldorf.
- Zehetner, Ludwig. 1985. *Das bairische Dialektbuch*. München.
- Zwart, C.-Jan Wouter. 1997. *Morphosyntax of Verb Movement. A Minimalist Approach to the Syntax of Dutch*. Dordrecht et al.

(日本学術振興会特別研究員)